

北村透谷と齋藤緑雨

— 緑雨没後一〇〇年を迎えて —

序

二〇〇四年秋、樋口一葉の肖像が印刷された新紙幣が使われ始めた。東京下谷竜泉寺町のスラム街で生活した一葉にとって、そのような厚遇は夢にも思わなかったことだろう。また同年は北村透谷没後一一〇年、齋藤緑雨没後一〇〇年に当たる年である。全国の透谷研究者が論文を寄せた北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』（笠間書院）が刊行されたり、故郷鈴鹿の地元作家や研究者が中心となって企画されたイベント「齋藤緑雨没後一〇〇年記念——緑雨の声よ鈴鹿に降れ」が開催されるなど、それぞれの作家にちなんだ記念行事が持たれた。透谷も緑雨も文壇の中央で活躍したとは到底いえない存在だが、数知れない近代作家のなかで異彩を放った二人である。今日の私たちは、彼らの足跡を検証することを通じて、彼らが告発してみせた近代日本の諸矛盾をとらえ直すことができるはずである。

透谷は明治社会の急激な変動について「今の時代は物質的の革命によりてその精神を奪はれつゝあるなり」と表現した。⁽¹⁾ 明治政府が触れて回った文明開化の輝かしい成果の裡面で、農民層は分解して小作化

尾西康充

が進み、士族層は零落して都市下層労働者となった。新政府による圧政の下で苦しんでいる民衆の姿を、透谷は自由民権運動やキリスト教平和主義運動を通じて直視していたために、透徹した洞察力を持つことができたのである。他方、緑雨は寸鉄人を刺す評言を振るい、〈嘲罵の毒筆〉と呼ばれた彼の批評は、同時代の文学者から大いに恐れられていた。だが、ときには捨て鉢になっているように感じられる緑雨の毒筆も、ときとして誰も気付かないような社会の真実を言い当てる。たとえば、つぎのような警句 (aphorism) はどうだろうか。

剣を以てするも、筆を以てするも、強者は遂に弱者を扶くることなし、長く扶くることなし。弱者を扶くるは弱者なり、どの道のがれぬ弱者なり。同病相憐むに過ぎず。

(「眼前口頭」)

緑雨によれば、劍槍の上でも文筆の上でも強者が弱者を助けた例はない。弱者を扶助するのは弱者、しかも他に逃れようのない弱者であつて、それは同病相憐れむという性質のものであるという。緑雨は伊勢神かんべ戸本多藩の典医の息子であつたが、明治政府によつて家禄が廃止

された後、新たな職を得るために一家を挙げて東京に出た。当時わずかな秩禄公債では生活を維持することができなかった下級士族や卒族は、急速に零落して都市貧民層と大差ない状態に追いやられ、人力車夫や不熟練の日雇労働に従事するようになっていた。緑雨が上京した一八七六年（明治六）は、郷里で大規模な農民一揆が発生した年であった。伊勢暴動と呼ばれるその一揆は、松阪の櫛田川流域の農民が、明治政府の地租改正によって地価の三パーセントという高い税率が課せられ、納税方法が現物ではなく金納に変更されたことに不満を抱いていた折、米価の暴落に加えて川の氾濫による不作が生じ、遂に地租が払えなくなつて蜂起した。この暴動は（志摩・牟婁地方を除いた）三重の全域に及び、さらに愛知や岐阜にも飛び火するかに思われた。ただちに県令は大阪鎮台・名古屋鎮台に軍隊の派遣を、内務省に警視庁からの警官の派遣を要請して、暴力をもって彼らを鎮圧したのであった。当時、兵士や警官として雇用されていた者の多くは士族たちであり、明治政府によって苛虐の扱いを受けていた農民に与するどころか、日頃から鬱積していた不満を吐き出すかのように苛辣な暴力を振るつた。明治社会において同じように苦杯を嘗めた者同士であつたにもかかわらず、旧時代の身分意識を拭い去ることができずに、士族は農民と連帯することができなかつたのである。この光景を見ると、弱者を扶助できるのは「どの道のがれぬ弱者」だけであるとした緑雨の警句は、彼一流の深い洞察にもとづいて認められたものであつたと推察できよう。

本稿では、明治社会の諸矛盾を看破した透谷と緑雨との文学を、彼らの間で行われた論戦を振り返りながら、二人に共通する思想の核として（非暴力・非戦）があつたことを論じてみたい。

一

透谷が評論ではじめて緑雨（正太夫）に触れたのは「後の月影」であつた（『女学雑誌』第三二四号、一八九二年四月二三日）。透谷は、緑雨が巻き起こした義捐小説集の騒動に関して「義捐小説といふ憂ひを帯びたる広告の下に茶番に似たるものあり、さゝきげんに髣髴たる者あり正太夫の苦情も穴がち無理なりと思はれず」と述べている。一八九一年一〇月二八日に発生した濃尾大地震はマグニチュード八・四という大きな揺れを観測し、死者七二七三人、全半壊した家屋二二万戸に上つた。甚大な被害を救済するという目的で有志を募つて、小説集『後の月影』が編まれた。坪内逍遙や幸田露伴、巖本善治らに加えて緑雨も作品を寄稿していた。ところが緑雨は、本書の編集を手がけた幸堂得知・宮崎三昧の名前が新聞広告に大きく掲げられたのを見て、それは寄稿者の善意を踏みにじる売名行為であるとして、幸堂・宮崎の両名を非難し自分の原稿を引き揚げた。このような緑雨の行動に対して文壇の大方は、それが十分な思慮を欠いたもので、幾分妬みが混じっているのではないか、という冷やかな反応を見せた。その結果、緑雨は孤立を深めるのであつたが、透谷は大勢に流されず「正太夫の苦情も穴がち無理なりと思はれず」と彼に理解を示している。

つぎに透谷は、右の評論を発表した「女学雑誌」の次号に緑雨の作品を取りあげて本格的な文芸評論を行う。それが透谷の批評作品のなかでも評価の高い「油地獄を読む」である（「女学雑誌」第三一五、三一七号、一八九二年四月三〇日、五月七、一四日）。透谷が取りあげた緑雨の小説「油地獄」は「国会」に一八九一年五月三〇日から六月二三日にかけて連載された作品で、「小説評註」と「犬蓼」とを同時収録した単行本『油地獄』は一八九一年一月に春陽堂から出版された。小説のあらすじは、田舎から上京した法学生・目賀田貞之進が芸者・小歌に一目惚れして入れあげ、学業もおろそかになる。彼女に旦那がいることを聞いても信じられず、遂に募る気持ちを抑えることができなくなつて気がふれてしまうという（花柳もの）の一つである。花街の〈遊び〉を知らない野暮な青年が破滅するのは江戸文芸以来の（花柳もの）にはよくある話型だが、青年が下宿屋の二階に引きこもつて自らの妄想を膨らませ、あげくの果てに狂気の淵にさしかかるといふ描写は、言文一致体を使用した小説を通じて近代人の内面を成立させたといわれる二葉亭四迷の「浮雲」の手法に比すべき作品であると評価されている。

では透谷は「油地獄」のどこに注目したのか。透谷によれば、作者は「広く想像を構へ、複雑なる社会の諸現象を映写し出でんとにはあらで、或一種の不調子、或一種の弱性インコンシステンシー、フレールチイを目懸けて一散に疾駆したる」ことにすべての心血を注いだという。引用文中のルビ「インコンシステンシー」は、inconsistency、「フレールチイ」は、fally、が元の英語で、具体的に前者は「現社界が抱有する魔毒」を、後者は

「過去現在未来を通ずる人間の恋愛に対する弱点」を指すという。透谷が着目するのは心理や社会現象の描写の手法ではなく、緑雨が社会の深層にある「魔毒」をとらえようとしていることである。「緑雨は巧みに現社界の魔毒を写出せり」とし「われは非凡なる緑雨の筆勢を察して、彼が人類の心宮を観するの法は先づ其魔毒よりするを認めたり」という。透谷は「心宮」という言葉を使って緑雨を評価しているが、透谷のいう「心宮」とは、「人須く心の奥の秘宮を重んずべし、之を照らかにすべし、之を白からしむべし之を公ならしむべし」というように、それを重んじて表現するのが文学の目的であるとまで断言した、きわめて重要なモチーフである（「各人心宮内の秘宮」、「平和」第六号、一八九二年九月一五日）。

そして透谷は、緑雨について「著者の眼中社界の腐濁を透視し、人類の運命が是等の魔毒に接触する時に如何になる可きや迄甚深に透徹す。是点より観察すれば著者は一個の諷刺家なり」とする。ただし透谷によれば、諷刺家には「仮時的なる者」と「永遠なる者」との二種類ある。ルビ「テンポラル」は（temporal）が元の英語で、「仮時的なる者」は「一時の現象を相手」とし「政治を刺し社界を諷する者等」であるのに対して、「永遠なる者」は「人生の秘奥を以て相手」とし「人生の不可避なる傷痕を痛刺して自らも涙底に倒れんとするが如き者」である。では緑雨はどちらの諷刺家なのか。「現社界が抱有する魔毒」をとらえ、「過去現在未来を通ずる人間の恋愛に対する弱点」を描き出そうとしている点から推せば、第一種の特徴を兼ね備えた第

二種の諷刺家といえるのだが、残念ながら「譬喩に乏しく構想のゆかしからぬ所より言へば未だ以て諷刺家と称するには勝へざるべし」と手厳しい。なぜ緑雨にはそのような欠点があるのか、その理由を透谷はつぎのように説明している。

奇想却つて不平の如くに感ぜらる、斯くの如きもの緑雨が撰みたる材料の不自然にして顕著に過ぎたるものなりしことより起るなり。何が故に不自然なりと云ふ、曰く社会の魔毒は緑雨が撰みたる材料の上には商標の如くに見はるれば、之を罵倒するは鴉の黒きを笑ひ、鷺の白きを罵るが如く感ぜらるればなり。

罵倒する材料すでに如此なれば其痛罵も的を外れ、諷刺も神に入らざるこそ道理なれ、又惜しむべし。

透谷によれば、作品の素材が不自然なので緑雨を諷刺家と呼べない。緑雨の作品では、罵倒するために選ばれた対象は、他の人たちから罵倒され尽くした陳腐なものでしかないという。たしかに厳しい見方をすれば、緑雨が得意とした〈花柳もの〉は、遊女と彼女のために身を滅ぼす野暮な男との道行き、という語り古された話型を踏襲したものにすぎない。心理や社会現象の描写の手法に新しさが見られるといつても、話型そのものはすでに手垢にまみれたものである。だが諷刺の技法が未熟であると批判した一方で、透谷は彼につきぎのようなエールを送る。

惜む、惜む、この諷刺の盈々たる気を以て譬喩の面を被らず素面にして出たることを。惜しむ惜しむ、この写実の妙腕を以て徒らに書生の墮落といへる狭まき観察に偏したることを。君に写実の能なしとは言はず、天下君を指目するに皮肉家を以てす、君何んすれぞ一蹶して一世を罵倒するの大譬喩を構へざる。

小説評註は些技なり、小説家幾人ありとも未だ罵倒すべき巨幹とはならざるを知らずや、罵倒すべき者あり、爆発弾を行る虚無党が敵を倒す時に自らも倒れて同じく硝煙の中に露と消ゆるの趣味を能く解せば、いざ語らむ、現社界とは言はず、幾千年の過去より幾千年の未来に互る可き人間の大不調子是なり。

なぜ、書生の墮落といった話まらない素材を捨て、「一世を罵倒するの大譬喩」を構想しないのだろうか。もし真に罵倒すべき相手を悟り、「爆発弾を行る虚無党が敵を倒す時に自らも倒れて同じく硝煙の中に露と消ゆる」感覚を共有できるのなら、現代のみならず「幾千年の過去より幾千年の未来に互る可き人間の大不調」を描出することができるといふのである。透谷はこのように緑雨にエールを送っており、同時代の作家のなかでとりわけ緑雨に大きな期待を抱いていたことが分かる。透谷のレトリックとして「爆発弾を行る虚無党が敵を倒す時に自らも倒れて同じく硝煙の中に露と消ゆる」感覚に共有する者という表現が印象的で、先にも「人生の不可避なる傷痕を痛刺して自らも涙底に倒れんとするが如き者」という表現があった。いずれも透谷にとって理想的な文学者のイメージであるのは、生前の透谷との交友を作品の素材とした島崎藤村の「春」という小説のなかにも同様の表現

がみられることから推測される。「春」のなかで、明治社会の矛盾に憤激するあまり精神のバランスを崩してしまった青木の姿は、つぎのように描かれている（「春」は「東京朝日新聞」一九〇八年四月七日〜八月一九日連載、単行本として『春』「緑蔭叢書第貳篇」一〇月一八日、自費出版）。

夕日のひかりは部屋の内に満ちた。反抗憤怒の情は青木の胸を衝いて湧き上つて来た。彼は爆発弾を投げる虚無党の青年の例などを引いて、敵を倒すと同時に自分も倒れて同じく硝煙の中に消えて行くことなどを言つて、目的は兎に角、すくなくも其の精神は勇ましい、斯様なことを妻に対つて熱心に語り聞かせた。

『あゝ、お前も敗北者なら、俺も敗北者だ——奈何だね、いつそ俺と一緒に……』

（六十四）

藤村にとつても透谷の「爆発弾を投げる虚無党の青年」の話が印象的であつたのだろう、青木の人物像を表現する際に、それを取り入れている。一八八一年三月一三日（ロシア暦二月一日）、首都ペテルスブルクでロシア皇帝アレクサンドル二世がナロードニキの一派「人民の意志」派青年によって爆弾を投じられ暗殺される。一八七〇年代、バクーニンやネチャーエフらの無政府主義的な「人民の意志」派は「暴力はただ暴力に抗する場合のみ正当化される」という論理に従い、ツァーリズムに対してテロ戦術を用いて皇帝と政府高官の暗殺を圖つ

た。アレクサンドル二世は一八六一年に農奴解放令を發布し、その後も裁判や地方自治、教育、国民皆兵制度など一連の国民主義的な改革を行った。しかし人格的自由と土地の所有を認めようとした農奴解放は、実際のところ農地の分与は有償で、地主に二カ年以内に買戻金を納めなければならぬという旧地主本位の不徹底なものでしかなく、多くの農民が土地を失つて離村し都市の賃金労働者になった。またアレクサンドル二世は一八六三〜六四年のポーランド独立運動を鎮圧し、そのロシア化を進める政策を進めたり、国内のナロードニキの運動に烈しい弾圧を加えるという庄政者の相貌を持っていた。そのため列車爆破未遂や冬宮爆破未遂などが企てられ、彼の生命が狙われる事件がたびたび発生したのである。

ところで、早くから自分が「小説家たらんと望」を抱いていたという透谷は、妻に宛てた書簡の草稿で、「然れども未だ美術家たらんとは企てざりし希くは仏のヒューブ其人の如く政治上の運動を織々たる筆の力を以て支配せんと望みけり」と述べている（一八八七年八月一八日書簡草稿）。自分が目指す小説家は芸術的作品を創作する者ではなく、（フランススのユノー [Victor Marie Hugo] のように）政治上の運動を指導するような作品を発表する者だという。透谷が明治社会の階級的矛盾を見抜いていたことは、「権力は次第に一方に集り、生産の成果は只一部の種族に籠絡せられ、社会党は日に増加し、無産の輩は遂に有産の輩に勝ち、曲は正を打ち邪は直を亡ぼすの時も遠からずして来るべし」と記していたことから分かる（石坂ミナ宛一八八七年一月一四日書簡草稿）。

先に見たように、緑雨に対する批評で「爆発弾を投げる虚無党の青

年」の話を持ち出してはいたが、透谷が現実にそのようなテロリズムに走ったかといえ、決してそうではなかった。なぜなら彼は「暴力」に対して一貫して拒否を示していたからである。明治新政府による暴力はいうまでもなく、民権壮士が豪毅さを尊ぶあまり家庭内で振るっていた暴力などにも、「彼が政談を為す時は一個の愛国者なり、彼れが家庭に帰る時は既に一家の破壊者、一国の破壊者たるを甘んず」として批判している（「時勢に感あり」、『女学雑誌』第二〇三号、一八九〇年三月八日）。さらに暴力を拒絶する意思が最もよく示されているのは、大矢正夫たち武相困民党のメンバーが爆弾テロを計画した際に、透谷が彼ら盟友と訣別した行動であろう。その結果、民権派同志を裏切つて「アンビションの梯子」より転落し、自責の念から心理上の苦獄の生活を強いられた。透谷はあくまでも作品の執筆態度として「爆発弾を投げる虚無党の青年」のイメージを喚起させたのであった。

日本近代史を専門とする芝原拓自氏によれば、「東京曙新聞」や「自由新聞」、「朝野新聞」など民権派の新聞は、他紙に比べてロシア虚無党に対する関心が強かったという。「ロシア帝国主義の東アジア・日本への侵略・併合の脅威という緊張感、その非難すべき東洋的専制主義の国家体制という面で、民権派のナショナリズムと立憲議会主義がいちじるしく刺激されていただけに、そのロシアでの過激な反体制運動が、とりわけ強い関心をそそっていた」⁽²⁾。他紙が革命の思想を僻説とし、テロリズムの恐怖を主張するだけであったのに対して、民権派の新聞はロシア虚無党を「同じく体制批判・変革運動を担う主体的立場」から報じた。芝原氏は、それらにおける「同時代の欧米の変革運動と思想への鋭敏にして内在的な認識努力と社会啓蒙の意義は、決し

て過小評価しうるものではない」とする⁽³⁾。

他方、文学の面で、木村毅氏は一八八二年に虚無党に関する文芸書が三冊も発行されていることに着目した。ロシア虚無党に社会の関心が高まっていたと推定し、「爆発弾を投げる虚無党の青年」のイメージについて「当時の愛国志士の中には、敵愾心から、自分達の憎んでいる魯国の皇帝や為政家を彼等虚無党の志士が威嚇してくれたという点で、それを味方の如く考えた者もないとは限らない」とする⁽⁴⁾。これらの背景を考えると、透谷は基本的に民権派と同じ「体制批判・変革運動を担う主体的立場」からロシア虚無党を評価していたといえるのだが、彼の場合は、国家規模のテロはいうまでもなく家庭内の行為に至るまで、いかなる暴力も拒絶していたことを忘れてはならない。しかし新聞や文芸書を通じて得た知識にもとづいて、「爆発弾を投げる虚無党の青年」に最大限の共感を抱いてもいたのである。

二

前章では「後の月影」「油地獄を読む」を取りあげて、透谷が緑雨をどのように評価し、彼に何を期待していたかを明らかにした。そこで本章では、透谷と緑雨との彼らの間で行われた論戦を振り返ってみよう。

透谷がつぎに緑雨に触れたのは文芸時評「文界要報」であった（『女学雑誌』甲巻第三三〇号、一八九二年一月二日）。そのなかで透谷は、緑雨が文壇の冷ややかな反応を受けて挫折をくり返した結果、

現在は「遊戯三昧の評家の影のやうやく薄らぎて真面目なる批評の氣運次第に進みたりと覚えて先づ喜ばし」と述べている。緑雨の批評態度が「遊戯三昧」から「真面目」へと變化したことに肯定的な評価を与えている。だがこの一文中、透谷が「流行子」を緑雨のペンネームと誤認したことに、緑雨は反論して「正太夫は正太夫なり」という小論を発表する（『国会』一二月二九日）。彼によれば、国会新聞記者・村松恒一郎の「柳江」というペンネームと発音の同じことから彼を「流行子」と「戯れに呼んだ」だけであり、「正太夫」と「流行子」は別人である。「さるにても斯る粗漏の事柄をかゝけて、漫りに評めかしたる語を加へ、しかも題して文界要報といふ、烏澁（をこ）の限りにあらずや」という。

「烏澁の限り」と罵倒された透谷は早速「正太夫と流行子」を発表して自分の誤りを認め、緑雨の指摘を受け容れる（『女学雑誌』甲巻第三三三三号、一二月三日）。そして翌夏、緑雨が再び透谷を攻撃する。

路を行くに泥溝あり宜く飛越ゆべしおのれ飛越ゆることをな
さず忽ち泥溝に陥り満天下の諸君人は何故に泥溝に陥る乎と今
更の如く泥溝の中で絶叫するものは女学雑誌の末社なる『評論』
『文学界』の一派及民友社派の一部分なり透谷の如き遂に浮む
瀬はあらず

右の引用は「思ひ寄れるまゝ」という小論の一節である（『読売新聞』一八九三年六月二二日）。このなかで緑雨は透谷の姿を戯面化し

て表現している。泥溝に陥っているのは自分だけなのに、なぜ人間は泥溝に陥る存在なのだろうかと絶叫している透谷のような愚かな者には助かる機会も得られない、と諷刺するのである。この表現の背景には、同年の年頭から火ふたが切られていた山路愛山と透谷との人生相渉論争があると考えられる。文学は人生と、社会とどのように関わることかという近代文学の成立期に発生した問題をめぐって論争が展開されたのであるが、緑雨にとっては、どちらの主張もキリスト教文学という同じ土俵の上でなされたものでしかなく、一見シリウスに感じられる論争も、キリスト教文学で表現された恋愛神聖論と同様、唾棄すべき代物であった。文学がいかなる事業もなし得ないのは当然であり、もし事業をしようと思えば、緑雨が非難した義捐小説集の一件のように、その企ては偽善に満ちたものになる。透谷は論争のなかで、松尾芭蕉「明月や池をめぐりてよもすがら」の句を例にあげながら、現実の物質世界に取り巻かれた人間でも芸術的な境地に目覚めることを通じて「絶対的のもの、即ち Idea」に触れることができることを説明した。そして「嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ」と叫んだのであった（『人生に相渉るとは何の謂ぞ』、『文学界』第二号、二月二八日）。緑雨には、透谷のこの絶叫が到底耐えられないものに感じられたのである。

右の攻撃を受けた透谷は「文界時評」に「諷刺」という項目を掲げて反論する（『評論』第八号、一八九三年七月一五日）。手当たり次第に毒筆を振るっている緑雨に対して、諷刺には「遊戯三昧の諷刺」と「真面目の諷刺」が存在する。自分はぜひ「自ら抜くべからざる氣稟の存するありて、時代と場所とに限られざるものある」「真面目の諷

刺」を創作するように勧めるといふ。透谷にとつて時代と場所を超えて普遍的な意味を有する「真面目の諷刺」が眞の諷刺であつた。そして透谷はつぎのような皮肉を投げ返す。

憫むべし正大夫、眞土の道は遠ければ、折々は途中より引還されるも宜ろしけれ。さてもく人界には罵るべき材料に乏しきか、文人共何程の事かある、我等が泥の中にあるを憂ひなば、足下何ぞ早く泥の底を出でざる、足下の諷刺は遊戯か、真面目か。

透谷によれば、憫むべきは緑雨である。かつて自分で「正直正大夫死す」という戯書を記しておきながら、眞土の道は遠いのか、途中から引き返してきて憎まれ口をきいている。それにしても人間の世界には、罵るべき材料が少ないのだから、文学者を取りあげても詰まらない。そして透谷は「我等が泥の中にあるを憂ひなば」と表現し、泥に浸かっているのは緑雨も同じだとたしなめる。世俗の泥濘に足掻きながら作品を創作するのが文学なのであつて、それが嫌ならば作家を廃業する方がよい、というのが透谷の本音だろう。さらに続けて透谷は評論「情熱」のなかで、緑雨に対してつぎのような批判を述べている（「評論」第二二号、九月九日）。

齋藤緑雨におもしろき情熱あるは彼の小説を一見しても看破し得るところなれど、憾むらくはその情熱の素たる自から卑野なるを免かれず、彼の如く諷刺の舌を有する作者にして彼の如

く野賤の情熱をもてるは惜しむべき至りなり、彼をして一年間も露伴の書齋に籠もらしめばやと外目には心配せらるゝなり

透谷によれば、緑雨の情熱は「卑野」で「野賤」なものでしかない。一年間、幸田露伴の書齋に籠もらせて修業すれば、それが直るかも知れないという。このような透谷の言葉は、緑雨に劣らぬほどの痛烈な皮肉である。この一文を以て透谷と緑雨との間で行われた論戦が終わるのだが、当初は透谷が緑雨に期待を寄せ、「油地獄を読む」でエールを送るという場面があつたにもかかわらず、残念ながら、そこからお互いの文学を深め合うという方向には進まなかつた。一言でいえば、文学を創作することは「遊戯」なのか、あるいは「真面目」なのか、近世から近代へと時代が変化すると共に文学も、言文一致体を使用してシリアスな内面を語るという形式が定着して行くのであつたが、緑雨の場合、自分の小説においてその可能性を散見させたにもかかわらず、自覚的に取り組んだものではなかつた。それに比してすでに透谷は自由民権運動やキリスト教平和主義運動を通じて近代社会に深く自己投企しており、近代のパラダイムにもとづいて、そこに現れ始めていた（近代）と（反近代）との相剋をとらえようとする立場にあつたのである。

結

透谷と緑雨とは、文学に関しては相容れない部分が多かつたが、二

人に共通する思想の核として「非暴力・非戦」があったことを、本稿の最後に、緑雨のエピソードを引きながら触れてみたい。

緑雨には二人の弟がいた。謙と謙である。一八七三年生まれの謙は理科大学（東京大学理学部）卒業後、地質学者となるが、一九〇一年五月に台湾での現地調査中に二六歳の若さで病没する。謙が死去した知らせに接した緑雨の落胆は、甚だしいものであったといわれている。法律や文学などの道に進むのを断念し、弟たちの学資を稼ぐために一方ならぬ苦勞をした。緑雨には小学校を卒業したという記録すら残されていない。他方、一八七七年生まれの謙は医科大学（東京大学医学部）を卒業後、小山田家の養子になって家業の医師を嗣ぐ。日露戦争が始まると、謙の許に召集令状が届いた。仙台第一師団野戦病院の配属が決まって、東京から離れることになったとき、弟の見送りのために緑雨は病を押して上野駅まで出かける。その際の様子を、当時緑雨の無二の親友であった無政府主義者・幸徳秋水への手紙のなかに記されている。

三十九度五分ノ発熱中ヲ車ト人トニ扶ケラレテ昨夜ヨギナク
上野ステーション迄参リマシタノデ 今朝ハ殊ノ外ノ弱リ方デ
スパカナ話デス 他ノ見送人ハ僕ノ病氣ナドハ少シモ問ハナイ
万歳ダノ大勝利ダノト喉ノ裂ケルヤウナ声ヲ出シテ居マシタ

（幸徳秋水宛一九〇四年二月一五日書簡）

高熱を發し、介抱されながら駆けつけた緑雨の胸中がよく伝わる手

紙である。喉も裂けるばかりの大声を出して兵士を見送る人たちを無神経な輩として批判している。この手紙の冒頭、緑雨は「急ニ僕モ非戦論デモ書キタクナツタ」と記して、「平民新聞」紙上に展開されていた秋水の非戦論に関心があったことを示し、緑雨独自の意見を開陳するのである。以下、この手紙を紹介し、緑雨のユニークな非戦論を検討することにする。

当時、秋水は「平民新聞」紙上に「吾人は飽く迄戦争を非認す」（第一〇号、一九〇四年一月）「兵士を送る」（第一四号、二月）「朝鮮併呑論を評す」（第三六号、七月）「トルストイ翁の非戦論を評す」（第四〇号、八月）などの評論を次々と発表し、戦争の惨事を告発すると同時に朝鮮半島の植民地化を批判していた。とりわけ人間を「一個の自動機械」に変えてしまう軍隊制度や、巷間の好戦的ムードを助長するマスコミに批判を集中させ、広範な世論を喚起し「非戦」に導こうとした。しかしこれらの主張に対して、緑雨は別の角度からの非戦論が必要だと述べる。毎日何千人となく後備・予備役兵の健康診断が兵營で行われている。驚くべきことに、そのうち病氣と診断されるものは一〇〇人に一人いるか、いないかであったという。戦闘が始まる前に斃れてしまう疑いのある重病人でさえ、出征するといつて聞かず、長い間病床に伏して瘦せ衰えた患者でさえ、「流涕シテ軍ニ従ハンコトヲ乞フテ止マナイ」からであった。それに似た話は他にも沢山知っているのだが、実際のところ生命を賭して戦う覚悟が兵士たちにある

わけではない。ただ「人々ノオダテニ乗ツテソシテ内心ニハ金鵝勲章ノ夢ヲ見テキル」だけである。

「嗚呼従軍の兵士、諸君の田畝は荒れん」と秋水は青年兵士たちに呼びかけた。だが緑雨によれば、そのような呼びかけには彼らは「チツトモ驚カナイ」という。

ナゼナラ勲章ヲサガテ剣ヲカチャくイハセ巻煙草ヲフカセ
 巴村ノ人タチハ皆平伏スルモノト思ツテキル 其平伏ノタメニ
 八田畝ナドハ考ヘテ居マセン

勲章を下げて帰郷すれば、村民たちはみな平伏するに違いない。功名心に逸る彼らの目には、荒れ果てようとする「田畝」の風景など入らないのである。緑雨は冷静な目で彼らを徹視し、その心理を明かしている。

ナルホド制度モワルイ、新聞ナドノオダテモワルイ、ソレハ
 ソレデ攻撃スベシデスガ一面ニ兵士及ビ其父兄ノ誤謬ヲタビシ
 テヤラネバイケマセヌ平民新聞ノ非戦論ハ前者ノ攻撃バカリデ
 後者ノ説得ガナイト思ヒマスガイカゞデスカ

緑雨によれば、軍隊制度や新聞報道なども攻撃すべき対象なのだが、

それと同時に「兵士及び其父兄ノ誤謬」を修正する必要がある。彼らの頭は今、人々をひれ伏させるような名譽を手に入れたい、との思いに満ちているからである。自分が負傷戦死するかも知れないことや、侵略される地域の民衆感情など考えようとしめない。その意味からすれば、秋水を始めとした「平民新聞」の非戦論には、国家間の戦争といえども、闘いは一人ひとりの心の内側から始まっているという視点が欠けている。人間の心の奥をのぞき込んで、そこに巢喰ったエゴの細部までとらえて批判するという緑雨の冷静な目は、彼独特のものといえる。秋水との書簡のやりとりから伝わってくるのは、手塩にかけて育てた弟が軍に召集されたことを嘆き、彼が真摯な気持ちで（非戦・非暴力）の思想を抱いていたことだろう。このような緑雨の思想に関しては、国家規模のテロはいうまでもなく家庭内の行為に至るまで、いかなる暴力も拒絶していた透谷の思想と、それらの根底で相通するものがあつたと結論できよう。

注 北村透谷の本文は『明治文学全集』第二九卷（『北村透谷集』筑摩書房）、斎藤緑雨の本文は『斎藤緑雨全集』（筑摩書房）に拠っている。なお本文中の旧字体は新字体に改めている。

(1) 「漫罵」（『文学界』第一〇号、一八九三年一〇月三〇日）

(2) 「民権派の社会党・虚無党論」（『経済科学』第三四卷四号、一九八七年三月、名古屋大学経済学部、一六五頁）

(3) 同右、一七〇頁。なお東洋のルソーと謳われた中江兆民は、ロシア虚無党による皇帝暗殺事件をつぎのように論じていた。

露矢亜大帝が西欧より一時に文物被服を輸入して其国民の外皮を変じてより、歴世継承し、法律、経済、文芸、商工等一切社会の皮肉血液は漸次に發育したるも、其政術は依然として『ゴザツク』部落酋長たるの時に異ならず、專壇圧抑以て自ら得たりと為せるよりして、其社会は皮肉血液に富むも、神經に乏しく其中に此社会の神經たる自由の大義は反て欧州西方より其國に滲入し來り、或る一部人民の頭に宿り一激して彼の畏る可き忌む可き虚無党と成り、其外に向ふて膨張せんとする最大元素たる天使をペートルブルクの真中に於て弑殺せんとすることとは成れり、嗚呼此浮華の開化に養成せられ、此專壇の政治に苦虐せられ、変性して虚無党と成りたる露國の自由主義こそ、実に此國人種の團結を破り治安を害して其外面に張出んとする勢力を止むる一大収斂劑と謂可けれ。露矢亜靈鷲の大旗が韓城の上に翻へるの時は、或はペートルブルク官殿上火焰方に盛なるの日には非ざる乎。

〔東雲新聞〕第二八四号、一八八八年二月二三日

兆民はロシア虚無党を、西欧からもたらされた「露國の自由主義」が「浮華の開化に養成せられ、此專壇の政治に苦虐せられた」結果、「変性して」出来たものと紹介している。民衆が自由を求めて専制政治と闘うという点では、ロシア皇帝を共通の敵として彼らと日本の民権運動家が連帯できる可能性がある」と論じている。

(4) 『明治文学展望』(一九八二年一月三二日、恒文社、三二頁)

(おにし やすみつ、三重大学人文学部助教授)